



CanApple ニュース (258)

カーボン・エネルギーコントロール社会協議会 (CanApple)

事務局：民秋均
発行責任者：石谷治
編集責任者：八木政行

人生の岐路

名古屋大学 高島舞

2022年4月に名古屋大学大学院エネルギー工学専攻に着任した高島舞と申します。この場を借りて、これまでの研究経歴(岐路)を紹介させて頂きたく存じます。

2007年3月末、学部4年生での研究室配属を前に、事務室前の掲示板前で同級生20-30人が静かにその時を待っていました。私の所属した名古屋大学工学部物理工学科では、研究室配属は成績ではなく「掲示板に掲載の各研究室名と配属予定人数のとなり希望者が記名し、締切時間になったら確定」というルールのもと、締切までに学生同士の話し合いにより「おだやかに」決定する、というものでした。わたしが当初希望した研究室は希望者が多く、わたしは話し合いに参加する前から、当時もっとも「配属人数の多い」高井治研究室に鞍替えしました。高井先生はお忙しい先生で学部生との接点はほぼなく、授業もそれまで1-2回しか受けたことがないため、教授の顔どころか肝心の研究内容もほぼ知らない状態でした。今思えば、これがわたしの1つ目の岐路でした。高井研は大変大きな研究室で高井教授を筆頭に、准教授が(配属当時)3名おり、各准教授ごとに研究グループが分かれておりました(居室建物も別)。各グループへの配属は、15ほどのテーマ名と内容が50字ほどかかれた(担当教員名はなし)紙を渡され、第三希望まで選ぶものでした。わたしは「エネルギー・環境問題の解決に資する」といった文言にひかれ、大竹尚登先生のテーマを希望しました。高井研は教員が忙しい分(?)学生の団結力が強く、先輩・後輩との研究室生活の楽しさを味わいつつすぐに「研究のおもしろさ」に虜になりました。大竹先生の異動のために博士課程は東京工業大学に進学しましたが、学生時分は一貫して、ステンレス基材へのダイヤモンド状炭素(DLC)膜の合成とその特性評価(主に耐摩耗性と耐腐食性)

の研究に携わりました。DLC膜はプラズマCVD法などを用いて成膜し、研究時間の多くを基材の前処理や成膜に費やし、やっとの思いで作ったかわいいわが子(試料)を毎回「いい結果がでますように」と念じながら慎重に評価したものです。

博士取得後は(いい意味で)大竹先生のもとから完全に巣立ちたく、日本電信電話株式会社環境エネルギー研究所に研究員として入所し、グリーンマテリアルプロジェクトの創エネチームに配属となりました。創エネチームではユーグレナのような藻によるバイオ燃料創出や人工光合成の研究テーマが進行中でした。それまでわたしが蓄積した技術や知見はほぼ通用しない新しいテーマに戸惑いつつも(当時の人事に後々伺った話では「炭素」つながりでの配属とのこと。その理由に当時のわたしは絶句でした=現在はこれも今に通じる岐路だと確信し、当時の人事には感謝しております)研究に励みました。ところが、まずは勉強と参加した触媒討論会のポスター発表でまたもや岐路が訪れます。お目当てのポスターの「隣」で発表していた北海道大学の大谷文章先生に自身のポスターへとナンパされ(笑)あれよあれよという間に北海道大学触媒科学研究所(大谷研)の助教に着任したのです。大谷研ではもちろん光触媒の研究にどっぷり浸かり「研究とはなんぞや」を叩き込まれました。具体的には、光化学や電気化学、速度論に基づく環境浄化やクリーンエネルギー創製のための光触媒反応系の材料開発と光触媒反応の基本原理の解明にかかわる研究に従事してきました。

これまでの紆余曲折をご紹介しましたが、研究室配属時に心惹かれた「エネルギー・環境問題の解決に資する」研究に一貫して携われているのは本当に幸運だと思います。所属が変わった現在も光触媒のテーマを続けさせて頂いており、今後も新しいことに挑戦しつつ、地に足をつけた研究をしっかりと続けていく所存です。最後になりましたが、寄稿の機会を頂きましたこと、感謝申し上げます。これからも頑張ります!!!